

2024. 12. 29 (日) ルカ1：1～20

- 2:1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。
- 2:2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。
- 2:3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。
- 2:4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。
- 2:5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。
- 2:6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、
- 2:7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。
- 2:8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。
- 2:9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。
- 2:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。
- 2:11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
- 2:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つめます。それが、あなたがたのためのしるしです。」
- 2:13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。
- 2:14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」
- 2:15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」
- 2:16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。
- 2:17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。
- 2:18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。
- 2:19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。
- 2:20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

<説教>

先主日のクリスマス礼拝では1～7節を、午後の祝会では8～12節を、そして24日の燭火礼拝では13～14節を中心にして聖書から学びました。本日は15～20節を中心に続けて学びます。

〈御使いたちが彼らから離れて天に帰った〉とあります(15)。この〈御使いたち〉とは、初めに羊飼いたちのところに来て、救い主、主キリストのお生まれを告げ知らせた(一人

の) 御使い(9-12)と、彼がそのお告げをした後で突然現れた〈おびたしい数の天の軍勢〉のことです(13)。その御使いたちは、「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」と神を賛美しました(13-14)。罪深い私たち人間の救い主、主キリストである神のひとり子イエスが、人となってこの地上に来てくださいました。神としての栄光の姿をお捨てになり、人としても一番低くへりくだられて、貧しく〈布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりご〉(12)として生まれてくださいました。それは、貧しい羊飼いたちが、まず、そのみどりごイエスを〈見つける〉(12)ことができるためでした。そんな神と御子イエスの最高・究極の恵み、あわれみ、へりくだりのうちに神の素晴らしさ、栄光が一層大きく明らかになり、現されていると彼らは賛美しました。また、救い主イエスの十字架の死と復活によって神の怒りさばきから免れ、罪を赦され、神の和解に入れていただく本当の〈平和〉を〈みこころにかなう人々〉即ち「神の一方的なあわれみと恵みを受けた人々」に与えてくださる神は素晴らしいと〈御使いたち〉は賛美しました。そうやって精一杯神を賛美し、神に栄光を帰した後、彼らは羊飼いたちから離れて天に帰って行きました。

御使いたちがいなくなり、再び静かになった野原で、羊飼いたちは話し合い、言いました。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう」と(15)。ここに彼らの信仰が表されています。彼らは直接には御使いから知らされたことでしたが、それは〈主が私たちに知らせてくださった出来事〉だ、と正しく理解しました。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」(11)とのことばを信じました。更に「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。」(12)とのことばも信じました。主が「あなたがたはを見つけます」と言われたのだから、自分たちは必ず見つけることができると信じました。なお、〈出来事〉と訳されている語は「ことば」としばしば訳される語です。信仰とは「主が私たちに知らせてくださったことば」を信じることだということです。御使いが彼らに現れ、彼らが主の栄光を見たときの非常な恐れがここではもはやなくなっていたようです。そして反対に〈大きな喜び〉(10)、「神の栄光」と「神との平和」(14)がその心を支配し始めていたことでしょう。

彼らは〈急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当て〉(16)ました。見つけるためには当然、実際にベツレヘムに行かなければならなかったし、更に熱心に捜し求める必要がありました。おそらくベツレヘム中の家畜小屋とそこにある飼葉桶を探し回ったことでしょう。〈急いで行って〉とか〈捜し当てた〉という語には、そんな羊飼いたちの、「主のことば」に対する信仰の従順と熱心が現れています。こうして主なる神が、彼らに知らせてくださったおことばどおりに、彼らを彼らの救い主、主キリスト、イエスと出会わせてくださったのです。

〈それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせ〉(17)ました。〈この幼子について自分たちに告げられたこと(直訳「ことば」)〉とはもちろん、主が彼らに知らせてくださった出来事(15)のことです。〈この民全体に与えられる、大きな喜び〉(10)の知らせのこと、即ちこの幼子が救い主、主キリストだということ(11)、〈布にくるまって飼葉桶に寝て〉おり、またそれを自分たちが〈見つけ〉ること(12)、更には御使いたちの神賛美のこと(13-14)でしょう。羊飼いたちは、主イエス・キリスト(に

ついて自分たちに主から告げられた神のことば)の証人とされました。

〈聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚きました(18)。この〈聞いたひとたち〉というのがどれほどの範囲の人たちだったのか、はっきりとは分かりません。さすがにマリアとヨセフだけだったとは思えません。家畜小屋に隣接した家の人々が聞いたのでしょうか。羊飼いたちが家畜小屋から出て近隣の家々に声をかけて廻りもしたのでしょうか。とにかく分かりません。ただ、〈驚いた〉という表現には、「驚いただけ。それ以下でも以上でもない」という響きがあります。この羊飼いたちの証言を聞いて、「ではその飼葉桶に寝ている幼子を、自分も救い主、主キリストだと信じよう」と言う人がその場に現れたという様子がありません。その原因の一つは、〈聞いた人たち〉がただ単なる「羊飼いたちの話」として聞き、決して「主が自分たちに告げ知らせてくださった、主のことば」としては聞かなかったことにあるのではないかと思います(ヨセフとマリアを除いて)。

そんな中で、〈しかしマリアは、これらのこと(直訳「ことば」)をすべて心に納めて、思いを巡らして)ました(19)。イエスについては「この方がご自分の民をその罪からお救いになる」(マタイ 1:21)、「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます」(ルカ 1:35)などと知らされていきました。しかしそんな子を家畜小屋で産み、飼葉桶に寝かせることになるとは知らされていおらず、さすがにそれは厳しいという思いがあったかもしれません。でも羊飼いたちを通して聞いた主のことばを心に蓄え、思い巡らすことによって、マリアは主の栄光を見、平安を得たのでしょう。

さて、主によって知らされたみことばによってベツレヘムに導かれ、救い主、主キリスト・イエスにお会いした羊飼いたちは〈見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った)のです(20)。今や最初の「非常な恐れ」は完全に消え、あの御使いたちと同じように「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」と〈神をあがめ、賛美し)たのです。こうして神の〈みこころにかなう人々〉、即ち神の御子主イエスにある、神からの特別で一方的な恵み、あわれみを受けた人々、それ故に主が御使いを通してみことばによって救い主イエスのことを告げ知らせてくださった人々、またそれ故に主のみことばを素直に信じてイエスを自分の罪からの救い主として求め信じた人々である羊飼いたちは地上にありつつ天国の住民とされました。彼らのその後の人生は、もう神のさばきを恐れることなく、神を喜び神の栄光を現す人生となりました。自分の罪を赦され、神との平和のうちを歩む人生となりました。また主イエスのことを他の人々に知らせる者ともなりました。

皆さん一人ひとりが主のみことばを聞いて、私たちの罪からの救い主としてお生まれになったイエス・キリストを信じ、証しし、大きな喜びをもって、神をあがめ、賛美しながら歩む幸いな人生を送られるよう、主イエス・キリストの御名によって祈ります。